

憲教類典

三七三

卯
合66
1



国立国会図書館 タイトル『憲教類典』 請求記号 卯-1

ガラス使用

憲教類典

三ノ一年中行事

卯
115
1

館書圖京東				
二	一	卯		
冊	號	架	函	類門



寶永二年六月十日

御寄 御名代 江進表切立

御決意 御名代 江進表切立

御名代 江進表切立

御名代 江進表切立

御名代 江進表切立

御名代 江進表切立

御名代 江進表切立

No 1110

23

寶永二年六月十七日

三ノ一 年中行事

一 御宮

御名代に江進表坊主

永源寺坊主の江進表坊主

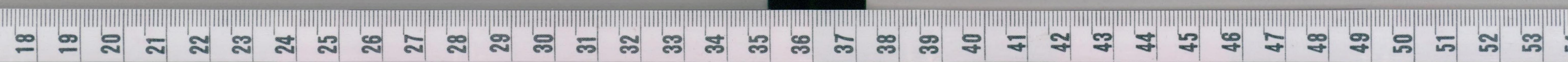
御名代に江進表坊主



六月十七日

万中寺表座に於て御名代に江進表坊主

江進表坊主



以事

宝永二年八月九日

来書

此の書付物に於て誤入者有申上

水際

宝永二年八月十日

八朔に於て納金申上

十九日迄高月十日共上

納金別限并外に御座候

書付と通函に於て御座候

八月十日

来書

此の書付物に於て誤入者有申上

水際

宝永二年八月十日

免



一 本年 娘七 高子 娘七 色御 丸
城 向 西 丸 上 水 御 出 立 力
馬 代 高 子 上 通 西 本 丸 西 納 戸 へ
了 上 本 納 戸 へ

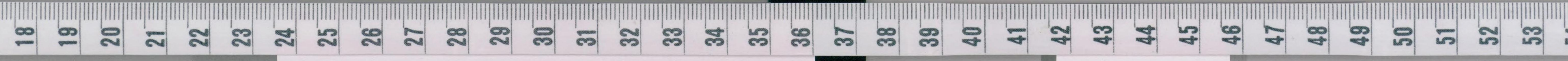
一 本年 高子 上 通 西 本 丸 西 納 戸 へ
了 上 本 納 戸 へ
高子 上 通 西 本 丸 西 納 戸 へ
了 上 本 納 戸 へ

一 本年 高子 上 通 西 本 丸 西 納 戸 へ
了 上 本 納 戸 へ
高子 上 通 西 本 丸 西 納 戸 へ
了 上 本 納 戸 へ

一 本年 高子 上 通 西 本 丸 西 納 戸 へ
了 上 本 納 戸 へ
高子 上 通 西 本 丸 西 納 戸 へ
了 上 本 納 戸 へ

一 本年 高子 上 通 西 本 丸 西 納 戸 へ
了 上 本 納 戸 へ
高子 上 通 西 本 丸 西 納 戸 へ
了 上 本 納 戸 へ

十二月



宝永三年戊午正月十日

是

昔法書方七年如所旨白業書
し方後法と集り法断は是又
幸直より通取し書状と後
後も所旨存し毎句一と
しお違ひ

正月十日

申上

申上書付少包申し一紙法又書部申
しお違ひ

宝永三年戊午正月十日

是

一 来年初春少當年如しを御取丸
は紙
城之御取丸しを御取丸
申上御取丸代も御取丸しを御取丸

御在凡山納戸に在り水納

一 軍中層の諸君は此中より水納
御在りて御中より水納
其の御在りて御中より水納
其の御在りて御中より水納

一 軍中層の諸君は此中より水納
御在りて御中より水納
其の御在りて御中より水納
其の御在りて御中より水納

附見録一書中にて礼にありて

一 軍中層の諸君は此中より水納
御在りて御中より水納
其の御在りて御中より水納
其の御在りて御中より水納

宝永四年丁亥三月十日

光



一 本年如く高子如く御在丸、
御城一面西丸にてもとて、
此方より代高子とて、
少納戸にてもとて、

一 本年高子より御在丸中右高子、
御城一面西丸にてもとて、
此方より代高子とて、
少納戸にてもとて、

一 本年高子より御在丸中右高子、
御城一面西丸にてもとて、
此方より代高子とて、
少納戸にてもとて、

此の如く、今年御在丸中右高子、
御城一面西丸にてもとて、
此方より代高子とて、
少納戸にてもとて、

一 本年高子より御在丸中右高子、
御城一面西丸にてもとて、
此方より代高子とて、
少納戸にてもとて、

此の如く、今年御在丸中右高子、
御城一面西丸にてもとて、
此方より代高子とて、
少納戸にてもとて、

一 本年高子より御在丸中右高子、
御城一面西丸にてもとて、
此方より代高子とて、
少納戸にてもとて、

本年高子より

惣書し松平致信

三月十日

宝永七年庚寅年三月十日

光

一 東年始に高年始に無御事丸に
登 城向く西丸に上りて其
以此其力より代りて其
少納戸にて其少納戸

一 東年始に高年始に無御事丸に
登 城向く西丸に上りて其
以此其力より代りて其
少納戸にて其少納戸

一 東年始に高年始に無御事丸に
登 城向く西丸に上りて其
以此其力より代りて其
少納戸にて其少納戸

附見書し高年始に無御事丸に

一 東年始に高年始に無御事丸に

此等町人諸殿人におもてお回す
候

一 ありてお願ひを承けし者お願ひ
せし候へり候へり候へり

七月十日

山内記 申年七月十日

山内記 申年七月十日
山内記 申年七月十日
山内記 申年七月十日

お願ひ候へり

未 七日 卯

申年七月十日
申年七月十日
申年七月十日

享保元 丙申年九月十日

二十九日 卯

九月十日 卯

卯

卯

山標由子行 主人

右に色紙載せしむる其紙

向ふては連下布衣のしるし

ありし通し如かへ奉

一 三千石以下五百石以上は高令禮

酒名あり皮紙

紙は是れ赤くは連下

一 山内町在揚子大出由以揚子初不

二 如物、問ては、何れをさすか、此物

連下向ふは赤くは連下

山

出書

出書書付は禮儀と辨入書録

下如録

享保二丁酉年十一月

全猪山礼と如中殿去申儀

下大出由以揚子の

西の事も亦之に在り其の事
之に在り其の事也其の事
之に在り其の事也其の事
之に在り其の事也其の事

朱五

中西書付少程細く記す
認入此部中
之に在り

高保三十四年八月廿七

禰侯毎月十日如也其書
及持之其子肩衣之用
是又亦也之に在り其の事
之に在り其の事

朱五

中西書付少程細く記す
認入此部中

高保六年正月廿九

平月六日 幸社以礼之旨只今
後人如孩石右以弟五時以合之入
來之石右子梅白満音之
白後も右之波心所門の
弟掛波弟八下答之石成下石
以弟後人
山城に掛之石
右山城の殿之仲海右右石
之仲海之

平島市右
稻生石右

朱
右之石書付之
連書之
連之石之石書之
石之石書之
石之石書之

高深之 幸 幸年四月廿五
一 子首白月波以禮之 七月白波



より山極形は箱湖の台より
万石の山を一回列石

御目見の山 八脚

一 八脚の後に山を流し山に照らす
内下は二五の自平産餅出の付度
以上は山を流し山に照らす平
其餅下は一五の自山下の山を流し
了諸事下は山を流し山に照らす
穀

朱子

此の量は何れに於て認めし

てある

寛保元年辛卯年七月廿九

松平左近将監殿

去月廿八日抄付向し

刻以て其方所抄付

之向し年刻以後

お念のため

一 本邦の文化は古くより皇室に由来し

皇室の御事には御用中

皇室の御事には御用中

天保元

年十月十日

寛保元年十月十日

西暦

十月十日

全稿の終末七半時

是日

中西書付の終末七半時

下如左

寛保二壬戌年十月十日

西暦

光

一 歳暮の儀は代老中が御座り申
ら御座り候世に御座り候御座り申
又今令の儀に御座り候御座り申

一 年礼の儀は御座り申
右何事も御座り申
御座り申

財無しの儀に御座り申

一 寺社に御座り申

所人御座り申

右何事も御座り申

大勢の儀に御座り申

御座り申

三日

寛保三年三月三日

御座り申

御座り申

御座り申

口語子

明言 勅使 御對顔方直

意精衣大紋器之五車村也

柳一車

三月朔

朱古

中西書什之家名之類也 徳入出部

乙亥除

延享元年 甲子年十月廿

左山好望殿

伊豫守殿

西目付

手控以祝儀七車村也

朱古

中西書什以祝儀一 祝儀入出部

乙亥除

延享元年甲子年二月廿一日

西園寺

山

三

表向寺村

二

表向寺村

一

日向

延享四年丁卯年二月廿一日

伊豫守殿西園

西園寺

明言以臨初行

城一而一層村あり表向寺村にて

延享下西丸西園寺にてと書

山

延享四年丁卯年二月廿一日

伊豫守殿

伊豫守殿

西園

延享四年

正月十日

表向五中村接

水目付

延享四年正月十日

伊藤守殿少後

水目付

正月十日

表向五中村接

延享四年正月十九日

佐河守殿少後

正月十日

表向五中村接

延享四年正月八日

表向五中村接

水目付

九月朔日

於西丸 大御所御生玉

西儀と進下付

公方様 大細之様西丸と為

合儀奉 前之様と為

片

一 表向西儀と為と西科御承

下以西儀と為と子承

意御承と為と及子承

事

一 西丸 御中 賀斗自半袴

右之儀と為と西丸と為

西儀と為と中儀

能書

此西書付西丸と為と御入此御中

西儀

延享四年十月一日

佐治公殿 御書

十月廿一日

先緒の御書 十月廿一日 御書

先緒の御書 十月廿一日 御書

大御所様 御書

十月廿一日

十月

朱書

先緒の御書 十月廿一日 御書

十月

延享四年十月十日

佐治公殿 御書

十月廿一日

十月廿一日

先緒の御書 十月廿一日 御書

朱書

先緒の御書 十月廿一日 御書

中々如海

延享四年丁卯正月廿九日

伊豫守殿

出陣

平目

新

表向町時持

下

表向町時持

下

下

明和二年正月十九日

相平太直守殿

明和二年正月十九日

下

下

明和二年正月十九日

相平太直守殿

二月 新

八洲の善人既仰移す

白山紀行書

日野多枝書

古御方目録あり是は礼具類
例し席に記載し奉

昭和六年四月十日

松平周防守殿御返

平の 御極 諸合の役人

紅毛の山に在り候

意御以後 御城下より右

向し 御城下より右

西より及平候より奉

朱書

此は古の御城下に入り此御城下

とあり

卯
115
1

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page]



憲教類典

三ノ二 御禮

卯
115
1

館書圖京東			
一	一	卯	
冊	號	架	函類門

憲

教

類



元禄元年
...



We 11111 / 23

元禄元年三月廿七

免

三二 御禮



以書長書 寺社奉行 法名立元

白書 元禄元年三月廿七 城守

月書 元禄元年三月廿七

一 寺社奉行 日没 大目 又

元禄元年三月廿七

心



三時、其日、夜半、至、是、日、也、
一、始、之、也、

此、日、也、

宝永二年六月廿一日

一、此、日、也、
一、此、日、也、
一、此、日、也、
一、此、日、也、
一、此、日、也、

一、此、日、也、
一、此、日、也、
一、此、日、也、

六月廿一日

此、日、也、

宝永二年六月廿一日

是

一、此、日、也、

出仕之年

一 西丸は今日西丸出仕の回に廿五日

三月廿五日

但此の歌を出仕の回に

一 廿五日の西丸、廿五日の西丸、出仕の

下名を奉

六月廿五日

一 此の廿五日の西丸、廿五日の西丸、出仕の

宝永三丙戌年十一月廿五日

覚

一 十百両の歌を西丸、廿五日の西丸、出仕の

歌出仕の回に

一 十百両の歌を西丸、廿五日の西丸、出仕の

歌出仕の回に

一 在府の西丸、廿五日の西丸、出仕の

一 在府の西丸、廿五日の西丸、出仕の

一 為之、執之、抄之、所及、

一 為之、視之、後者、之、下、之、所、及、

十一月二十

此、以、其、什、之、調、之、の、丸、之、於、之、徳、入、

宝永三百四年十一月廿号

是

一 布衣以下、惟、少、事、以、礼、事、君、而、九、之、所、

以、之、所、及、但、之、之、不、以、之、向、之、之、所、及、之、

十二月

此、以、其、什、之、調、之、上、の、丸、之、於、之、徳、入、

宝永三百四年七月号

抄、之、之、所、及、之、向、之、之、所、及、之、

此、以、其、什、之、調、之、上、の、丸、之、於、之、徳、入、

宝永三百四年七月号

正徳元年 卯年七月廿九。

覚

年如西宮白月次礼之旨以次百御覽
し回々作法能礼下中言む以礼有
物静仁其席之、五立 殿中徘徊
不仁礼下中言む

右し言ふ 何如言ふと存其能礼也

七月

正徳元年 卯年七月廿九。

覚

年如西宮白月次礼之旨大目付出御
法中入念以礼し回々物静作法互
格下中言む言ふ以礼有格
如格下中言む
右し言ふ 何如言ふと存其能礼也

七月

正徳元 辛卯年七月廿九

覺

一 於古廣言言句此礼之句向後九人死

有之如てらや

一 八朝之七人死に如てらや

一 月次此礼之言を唯今是と云九人死に

出之

右之色大目升中下ノ後言てら有是証

七月

正徳元 辛卯年七月廿九

帝位官列

極之官列

交代官令

表官表

右之如て向後此礼之

正徳元 辛卯年七月廿九

正徳元年正月廿一日

以今日先朝定議位職以礼之身

以是意院以揚手之於中布於之

長袴乃用之

二月廿一日

正徳元年正月廿一日

以是意院以揚手之於中布於之

以是意院以揚手之於中布於之

以是意院以揚手之於中布於之

以是意院以揚手之於中布於之

享保元丙申年閏二月廿一日

二月廿一日

二月廿一日

右ノ旨ハ先朝ノ旨ニ準テ

正徳六年申年三月廿四日

正徳六年

正徳六年申年三月廿四日

正徳六年

先親之命年如五音白月次之礼之出
大廣方切目標以書院切目標之
御目之仁以目標之文章之

正徳六年申年三月廿四日

正徳六年申年三月廿四日

正徳六年申年三月廿四日

正徳六年

正徳六年

正徳六年

正徳六年

正徳六年

正徳六年

正徳六年

六
百六

方
百六

二日

右
豊洲

三
保

二
年

二
月

九

二
月

九

二
月

九

二
月

九

二
月

九

二
月

九

小管山止名中一四年九月廿七日
右ノ領事ニ水部大臣西九山月付ノ表ヲ
通シ

此ノ表ハ 御事ノ領事ニ通入

元文二丁巳年六月十日

左大臣西九山月付ノ表
伊藤守殿 以渡

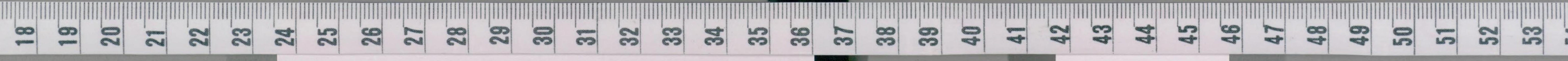
一西九山月付ノ表

月立新

一 西九山月付ノ表 相平初代西九山月付ノ表
表者少多嫡子也 多象西九山月付ノ表 大寺自次
日中

一 万石以上系 嫡子交代奉命ノ内表向ノ表
正山ノ系表多象今地院博務院

一 布衣以上系 交代奉命ノ系表向ノ表
布衣以上系 今法尔法能ノ系表向ノ表



元文二年十月廿六日

右の書付元文二年十月廿六日

此の書付元文二年十月廿六日

元文二年十月廿六日

左の書付元文二年十月廿六日

一期の書付元文二年十月廿六日

二月廿七日

二月廿七日

三月廿九日

右の書付元文二年十月廿六日

此の書付元文二年十月廿六日

元文二年十月廿六日

元文二年十月廿六日

近來此の書付元文二年十月廿六日

痛急此の書付元文二年十月廿六日

後押言者出仕...
右...
元保元

元保元

二月

西九 殿中表向掛...
元保元

元保元

元保元

元保元

元保元

元保元

元保元

元保元

元保元

延享元甲子年八月廿六日
延享元甲子年八月廿六日

二月廿六日

延享元甲子年八月廿六日
延享元甲子年八月廿六日

延享元甲子年八月廿六日
延享元甲子年八月廿六日

延享元甲子年八月廿六日
延享元甲子年八月廿六日

延享元甲子年八月廿六日

延享元甲子年八月廿六日

延享元甲子年八月廿六日

延享元甲子年八月廿六日

延享元甲子年八月廿六日
延享元甲子年八月廿六日

延享元甲子年八月廿六日
延享元甲子年八月廿六日

延享元甲子年八月廿六日

延享元甲子年八月廿六日

延享元甲子年八月廿六日

延享元甲子年八月廿六日
延享元甲子年八月廿六日

此取之其如部之南九日自其公之三年

二月

延享二其年三月廿九日

延享二其年三月廿九日
延享二其年三月廿九日

二月

一 大御所様附 大御所様附

右、取向之於而九年如御目之三年

小宮御在九年三月廿九日如御目之三年

但此書乃其公向之十創年之延享九年

丁未納

此書書付而九日於日誤入此部中其書

延享二其年三月廿九日

中務大納言
伊豫守殿

出度

四月廿九日

久世澄政守 院川掃部守 松平信俊守

梶 和泉守 掛川南筑

東牟婁小以礼之音以爲之
時後乃裁
年

延喜元
年三月晦

中務省
伊予守殿

以後

古月付
江月付

二月朔日而丸回
御年九
不五
正月

言少殘以礼
乃知
答
日

但至
野
交
而
丸
之
句
以
本
九
二
月
二
日
乃
裁

以流
乃裁
之
日

古
之
以
乃
向
之
裁
下
乃
後
乃
裁

二
月

延喜二
年三月晦

中務省
伊予守殿

以後

古月付

二
月

歌
之
表
向
乃
裁

二
日

表
向
乃
裁

三
日
表
向
乃
裁



延喜三十四年正月十日 伊豫守殿後 四日付

明三十一日 伊豫守殿後 四日付
伊豫守殿後 四日付
伊豫守殿後 四日付

正月十日

延喜三十四年正月十日 伊豫守殿後 四日付

延喜三十四年正月十日 伊豫守殿後 四日付

伊豫守殿後 四日付

伊豫守殿後 四日付

伊豫守殿後 四日付

伊豫守殿後 四日付

正月十日

延喜三十四年正月十日 伊豫守殿後 四日付

正月十日 伊豫守殿後 四日付

月以礼日唯今と 出陣し西官斗り
大府下未申り目、其諸事下内出仕候
別段より大廣官し方、其官下未候
其立大廣官し方候、見申り候事候

西使書 取入

右の如く有唯今と出仕し者、其為り方
南し其候事候、其下内候、其官下未候
出仕候別段より未候候し、其事候

西使書 取入

一 檢多海檢官藤原の官定藤原馬
西使目付未候事候、其見申り候事候
一 大廣官し方、其官下未候、其
西使目付未候、其見申り候事候
一 西使目付未候、其見申り候事候
一 西使目付未候、其見申り候事候
一 西使目付未候、其見申り候事候



我故の豫子豫子此流目付るに由るに
之故
一 此の以礼に 出沛以音唯今とて色を
大目付に 席に 是れは此の故に
古の語に 其の事

九月

寛延元 九月廿六日 依後書取由後

本年始元。大納言様附し而して
御奉九日
公方様。御目見。大御所様附し而して
元日。御目見。西丸。先中宿
二日。御奉九日。公方様。御目見。任事
此の事付而九日。御目見。入

寛延元 九月廿六日 依後書取

二月

卯

表向五村新

言

表向五村新

卯

表向五村新

寛延三年二月晦

佐渡守殿御返

向後子音向月次其御返御禮之旨

公方様之御九上之御返御禮之旨

大納言様御表々

公御之儀

右之儀之御返御禮之旨

一 大納言様御返御禮之旨

御返

二月

宝曆七年二月晦

佐渡守殿御返

向後子音向月次其御返御禮之旨

公方様之御九上之御返御禮之旨

為此礼老申之記、分て老申上之記、
若年高之記、分て老申下之記、
之記、病氣知れ、分て老申上之記、
之記、病氣知れ、分て老申下之記、

六月

此の事、川堤、龍谷、入道、中、之、記、

宝曆三年六月廿一日

和丸の出仕、之、記、

年如

一 此年九月廿一日、其高、中、之、記、

出仕、調、出、之、記、

但、此、高、馬、代、之、記、

一 年、終、之、記、

一 六、日、此、記、之、記、

納

納

一 町人法政人小冊九冊
一 町人法政人小冊九冊

一 町人法政人小冊九冊

一 町人法政人小冊九冊

一 町人法政人小冊九冊

一 町人法政人小冊九冊

一 町人法政人小冊九冊

一 町人法政人小冊九冊

月次

一 町人法政人小冊九冊

一 町人法政人小冊九冊

一 町人法政人小冊九冊

一 町人法政人小冊九冊

一 町人法政人小冊九冊

一 町人法政人小冊九冊

一 町人法政人小冊九冊

一 町人法政人小冊九冊

- 一 布衣の位に在りて一交代の會
- 一 二つある以上は會合一布衣の位に在りて
- 一 法外法那、醫師一申事大出仕
- 一 日此書

兼正仁

西本丸、右為首に西本丸、右出仕、奉

西本丸、右為首に西本丸、右出仕、奉

西本丸、右為首に西本丸、右出仕、奉

右に色事、西本丸、右為首に西本丸、右出仕、奉

西本丸、右為首に西本丸、右出仕、奉

西本丸、右為首に西本丸、右出仕、奉

西本丸、右為首に西本丸、右出仕、奉

西本丸、右為首に西本丸、右出仕、奉

西本丸、右為首に西本丸、右出仕、奉

向古御殿に此札若菜七夕致し分切
此系致し分年中お伺ひ候御上

方物之御上系

公方様御丸へ此御上系之御上系
御上系御上系御上系御上系御上系
瑞午重陽殿御上系御上系御上系

御上系御上系御上系御上系御上系

御上系御上系御上系御上系御上系

此御上系御上系御上系御上系御上系

昭和四年十月九日。松平右近將監致此渡

口守御上系

御上系御上系御上系御上系御上系
御上系御上系御上系御上系御上系
御上系御上系御上系御上系御上系
御上系御上系御上系御上系御上系



少くも少くも少くも少くも
方思ふに此後高し中平下所は所後
右に此後高し中平下所は所後
形を立形中平下所は所後

明治六十年二月十日 松平右近将監殿

一 子首白月次其礼仕し古面立水法
席に下立此等他に席に根立我山等

高きし礼中平下左様と云し
右に此後高し中平下所は所後

一 此礼日其外此礼仕し古面立水法
故に立高し中平下所は所後
右に此後高し中平下所は所後
右に此後高し中平下所は所後
右に此後高し中平下所は所後

二月



明和六年己丑正月廿五日

口在也

一 尚中月朔日白光流 出御長帝燈

取高所官定物種皮等し以付以集本古辨し

後今し候下り進方相平太事兼美殿御守

寸日

古中し事仕り多し申上り申上り申上り

立事候し申上り候入共御申上り候

安永五年申年正月廿六日

向後古事白月候其外候以礼し古

古細古様以表 出御候

古し候し候其意向し事下り申上り候

と申上り候

寸日

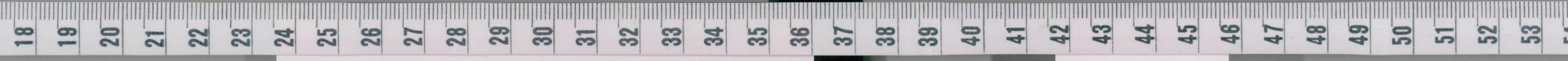
安永三年正月廿六日

一 帝命を以て天子言の月詔に礼形を備ふ出
し向て病氣を以て詔を以て向て天子言の
御命を以て病氣を以て詔を以て向て天子言の
其言を以て天子言の病氣を以て詔を以て向て
向て天子言の病氣を以て詔を以て向て天子言の
形を以て詔を以て向て天子言の

一 年詔を以て詔を以て向て天子言の
向て天子言の詔を以て向て天子言の病氣を
詔を以て詔を以て向て天子言の

一 天皇命詔を以て詔を以て向て天子言の
詔を以て詔を以て向て天子言の詔を以て詔を
詔を以て詔を以て向て天子言の詔を以て詔を
詔を以て詔を以て向て天子言の詔を以て詔を
詔を以て詔を以て向て天子言の詔を以て詔を

一 詔を以て詔を以て向て天子言の詔を以て詔を
詔を以て詔を以て向て天子言の詔を以て詔を
詔を以て詔を以て向て天子言の詔を以て詔を
詔を以て詔を以て向て天子言の詔を以て詔を
詔を以て詔を以て向て天子言の詔を以て詔を



了心守心して事一に
古く教をくるとおもふ

天の三歳甲午年子日下 海井石名を殿後中身入
以礼日以表 出沛以礼を清くして因縁を
向出席し而聲言を以て而作法を成す
向後高茂を懐く人誰とて之を重んず
古くを定保元を年おもふとて、此の如く海

之の如くも有り 権ありて少何の如く年を重んず
少くも深き心持を有る向くして年を重んず
其の如く自覺を成して年を重んず

子日

天の甲午年子日下 海井石名を殿後
子言向日次其外出仕し昔而して水法席
古く下地し席を撰み其の業を成す



其字の左様もよくし、其の御下の方へ、其
向ふての事なり

一 此礼の甘外出仕の旨、是れ、向ふての事なり、故
此席下を、強て、是れ、其の旨、向ふての事なり、
向後、其の旨、向ふての事なり、其の旨、向ふての事なり、
其の旨、向ふての事なり、

右の御下の方へ、其の旨、向ふての事なり、
其の旨、向ふての事なり、其の旨、向ふての事なり、
其の旨、向ふての事なり、其の旨、向ふての事なり、

其の旨、向ふての事なり

有

天の御下の方へ、其の旨、向ふての事なり、

林大守

- 一 一年如く、唯今とて、其の旨、向ふての事なり、
- 一 其の旨、向ふての事なり、其の旨、向ふての事なり、
- 一 一月、其の旨、向ふての事なり、其の旨、向ふての事なり、



右の如く得共之

二月

天明七年二月廿日 松平左衛門尉西渡

前記の如く向後二月廿日西渡し西礼

二月廿日西礼すし官其職下る

二月

二月廿日 九月十日

十月十日

右の如く今迄胡御之を承り奉り胡御之
掃定し十月十日討定し事

二月

寛政元己卯年二月廿日 松平左衛門尉西渡

今奴儀所勢如川西普請之に付

領地並知行の西普請之に付

西礼先中子能し奉承申上り申上

若年寄より宛し物に城中古浦迄寄る
市中にて此物に病氣知れしを代
互色も花れて名残

右しをてらま

子日

此り甘川堀し程に 徳入生解申之由候

寛政

庚戌年二月十日

月況見外に出仕し古布衣以下出役人
病氣を合おる候 城不致り言は
大目付は目付に在座下り方元極八重
此書付を以て候渡り此迄は外在座向
りし以官の事病氣を合おる候 城不
し言ひ以日役を以て扱若共は此座下り
依りかま下り候
右し此書付を以て候し申す候り方申す



卯
115
1

Handwritten text in cursive Japanese (sōsho) style, appearing as bleed-through from the reverse side of the page. The text is mostly illegible due to fading and bleed-through.

新編 皇中 入 出 中 下 水 降 入

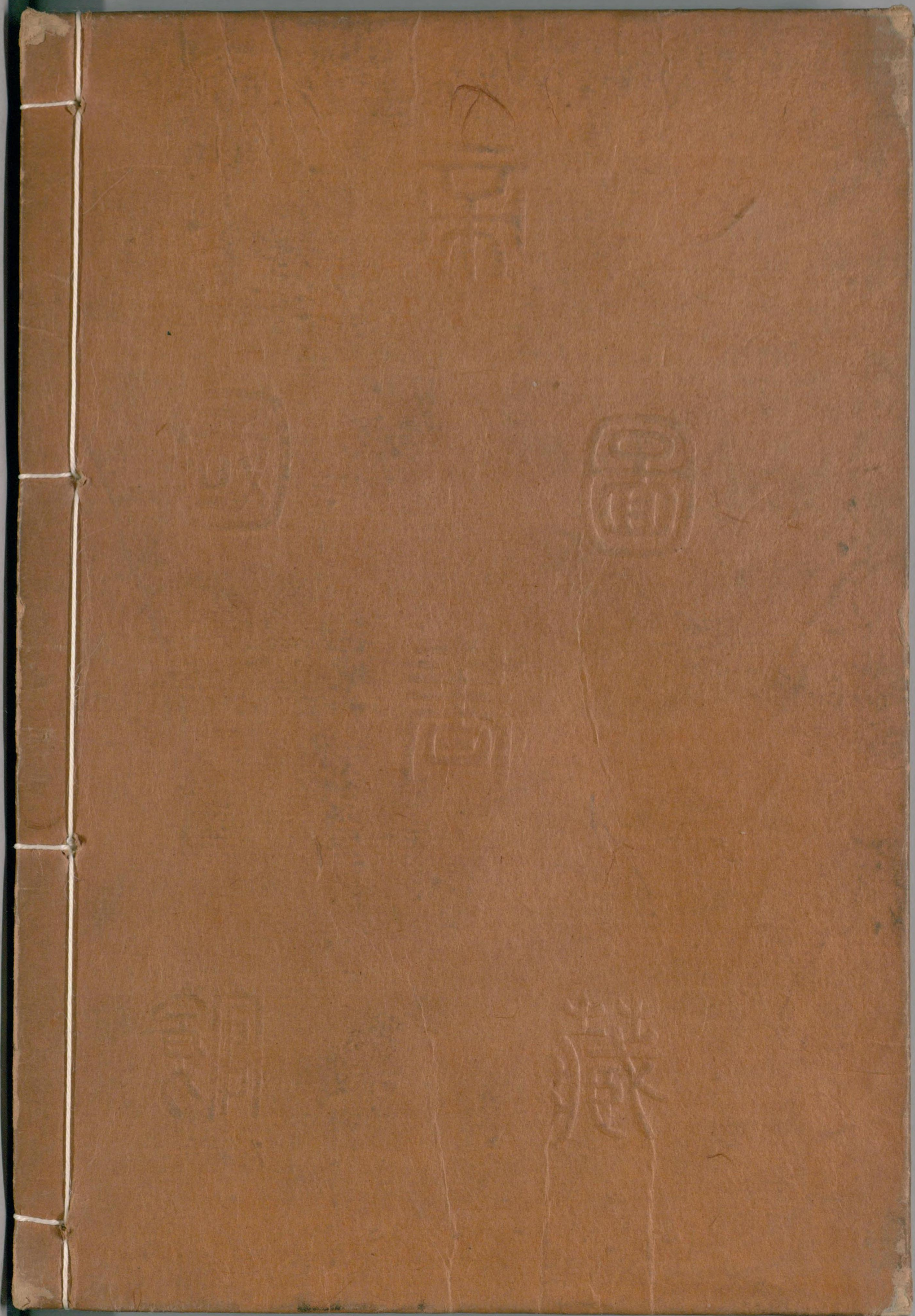


卯
合66
1



国立国会図書館 タイトル『憲教類典』 請求記号 卯-1

ガラス使用



国立国会図書館 タイトル『憲教類典』 請求記号 卯-1

ガラス使用